

それではヨハネの手紙第一をお開き下さい。この手紙のテーマは愛です。愛という言葉がこの手紙の中に全部で54回も使われております。愛という言葉がギリシャ語ではアガペーと言いますけれども、この愛という言葉が54回使われております。で、この手紙を書いたのは使徒ヨハネです。使徒ヨハネは晩年になってこの手紙をエペソの教会に宛てました。聖書の中にはエペソ人への手紙というのがあります。またパウロの後継者であったテモテという人もエペソ教会の若い牧師でありました。さらには黙示録の2章には、イエス・キリストがエペソの教会に個人的に手紙を宛てております。ですからエペソという教会は非常に愛されていたということが分かります。実にエペソと言う地名も英語ではダーリンと言います。愛される者です。ですが黙示録の2章によると、このエペソの教会ははじめの愛から離れてしまったと、イエス・キリストによってそのことが非難されております、指摘されております。そして悔い改めなさいと。はじめの愛に立ち戻りなさいと。皆さんも是非愛について深く考えて頂きたいと思います。繰り返し繰り返し愛について語られておりますけれども、聖書全体のテーマもまた愛と言っても差し支えないと思います。キリスト教を特徴づけているのは、この愛であります。その愛を伝えるためにイエス・キリストが遣わされました。口では何とでも愛しています、と言えます。でもその愛を実証してくださったのがあの十字架でありました。自分の命を与える程に、また父なる神様からするならば自分の命よりも大切なひとり子の命を私たちに与える程に、世である私たちを愛して下さいました。口先ではない、真実と行いをもってその愛は実証されたわけです。その愛に生きたヨハネという人がこの手紙を書きました。ですから彼は愛の使徒とも呼ばれます。ヨハネは愛の使徒と呼ばれるんですが、他にもヨハネは福音書を書きました。その福音書の中ではヨハネは自分の名を明かさずに、イエスに愛された弟子と自分のことを紹介しております。ヨハネはイエスの愛を一身に受けて、他のどの弟子よりもイエスの愛を深く感じ取れた。そんな愛の人でありました。ヨハネの福音書を書いた後にこの手紙を書いたとも言われます。また黙示録の前にこの手紙を書いたとも言われていますが、いずれにしてもその時のヨハネはもう90代、100歳近かったと思われる。よぼよぼのおじいさんです。ですからこのヨハネの手紙の中では自らを長老とも自称しているわけですが、この長老がエペソの教会で集会がもたれた時に一言メッセージを彼らに告げました。そのメッセージはいつも決まっておりました。お決まりの言葉です。「子供たちよ、^{おきなご}幼児たちよ。互いに愛し合いなさい。」続きがあると思ったらそれまで。その一言でいつもメッセージは終わっていたと言われております。ヨハネの口癖は「互いに愛し合いなさい。」これが、ヨハネが最も伝えたかったメッセージであります。

第一ヨハネ3章の11節を開いてみて下さい。『互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。』

23節。『神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。』初めから聞いている教えとは、イエス・キリストによって命令された教え。それは互いに愛し合うことであると。

4章7節も見て下さい。『愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。』

11節。『愛する者たち。神がこれほどまでに私たちに愛して下さったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。』

12節。『いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。』

同じく使徒ヨハネが書いた手紙で**第二の手紙**があります。第三までありますが、**第二ヨハネ**、**1章**しかありません。その**5節**もついでに開いて頂きたいと思います。『そこで夫人よ。お願いしたいことがあります。それは私が新しい命令を書くのではなく、初めから私たちが持っていたものなのですが、私たちが互いに愛し合うということです。』ここにも初めから私たちが持っていたものだと言われていますが、この初めというのは勿論イエス・キリストが初めに教えた教えです。

ヨハネの**福音書 13 : 34~35** にその初めの教えが記されております。テーマとして愛の教えです。ヨハネ自身のオリジナルではありません。新しい教えではなくて、これはイエス・キリストが教えられたことです。『³⁴あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』1人でも多くの人に救われてもらいたいと願うならば、私たちは真っ先に互いに愛し合うべきであります。クリスチャンがお互いに愛し合うその姿が最もインパクトのある伝道方法とここには記されております。勿論福音を言葉で伝えたり、伝道集会に誘ったり、福音のまとめられたトラクトや小冊子をプレゼントすることもまた1つの伝道方法ですけども、ただ最もインパクトのある効果的な伝道方法とは、クリスチャンが互いに愛し合うことでもあります。逆にクリスチャンが対立しあって、妬み^{そね}あつて仲が悪かったら、だれもクリスチャンになりたいとは思わないわけです。いくら美辞麗句を並べたところで、いくら聖書の尊い御言葉を引用したところで、クリスチャン同士が愛しあっていないならば、何の力もありません。何の魅力もありません。ですからクリスチャン同士の愛し合うその美しい、麗しい姿が実にノンクリスチャンたちの目を惹くわけです。「素晴らしい。この人たちは血も繋がっていないのに、肌の色も違うのに、国籍も違うのに、性格も趣味も生まれ育った背景も何もかも違うのに、でもどういふ訳か他にはない愛を持っている。そしてそのような愛を私も持ちたい、知りたい、味わいたい。」と願うようになるわけです。

またヨハネの**福音書 15 : 12** もお聞き頂きたいと思います。これもイエスの言葉です。『わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。』

17節も。『あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。』全く同じことをイエスが繰り返しております。ですから愛の人と呼ばれるヨハネが毎回メッセージの中で口癖のようにして言う、「子供たちよ、幼児たちよ。互いに愛し合いなさい。」と。その通り一辺倒と思えるようなそのメッセージはイエス・キリストが最も伝えたかったメッセージ、最も強調したメッセージであったということをヨハネがしっかり理解して、そしてヨハネもまたイエスに倣って忠実にイエスのメッセージを取り継いでいたということに他なりません。ですから何度も何度も同じことが繰り返されてしつこいと思えるかもしれませんが、これ以上に大切な事が他にないんだということを知れば、ある意味で納得いくと思います。私たちは忘れやすいものです。互いに愛し合いなさい、それは聞いておりますし、知っていますし、たまには意識します。でも何度も何度も言われているところに注目して下さい。私たちはすぐ忘れるものです。何が一番大事なことなのか、見落としてしまいます。あれでもない、これでもない。本当は互いに愛し合うことこそが一番大切なことなんだと。そのことをまた**ヨハネの手紙**の中で皆さんは何度も確認することになります。

で、もう一度テキストに戻っていただいて**ヨハネの手紙第一**です。この手紙が、このラブレターが書かれた理由がこの手紙の中にはハッキリ書かれております。目的とも言えます。何のためにこの手紙が書かれたのか。なぜこの手紙が書かれたのか。それは3つと言われますけれども、私は今日4つ皆さんに提供したいと思います。4つの理由、4つの目的をこの**ヨハネの手紙**の中から拾っていききたいと思います。

まず第一番目になぜ**ヨハネの手紙第一**が書かれたのか。**1章4節**を見て下さい。『私たちがこれらのことを書き送るのは（このヨハネの手紙第一が書かれた理由は、目的は）、私たちの喜びが全きものとなるため

です。』私たちの喜びが全きものとなるため、これがヨハネの手紙が書かれたまず第一の理由、目的であります。この部分は口語訳ならびに新共同訳聖書では、喜びが満ち溢れるようになるためです。喜びが全きものとみれば、喜びは完全になる、パーフェクトになる。で、それは同時に満ち満ちるということでもあります。喜びが爆発するように、泉のごとく溢れ出ると。ただの喜びでない事は明らかです。私たちも時に喜ぶことがあります、それは時にであって、ぬか喜びということでもあります。つかの間の喜びということもあります。一時の一時的な喜び、一過性に過ぎない喜び。喜んだと思ったら次の瞬間、よろ転んじったとか。そういうことが多いわけですが、でもここではその喜びが全きものとなるため。その喜びが満ち溢れるようになるためです。要するにその喜びが絶え間なく持続して自分の中では収まりきれないほどに他者に行き渡るように、他者に及ぶように、他者にもこの喜びがある意味伝染するような喜びです。爆発的な喜びの事を言っているわけです。この喜びは深い喜びであります。表面的な喜びではなくて、内的な深い喜びです。その喜びは魂を通り越して霊の部分で感じ取れる喜びであります。人間というものは3つのものから成り立っております。それは人間が三位一体の神に似せて、そのかたちに似せて造られたからであります。父なる神、子なる神、聖霊なる神という三位一体の神に似せて人間は造られました。人間の場合は肉体と魂と霊、その3つのものによって構成されております。肉体において喜ぶ事は皆さんは良く分かると思います。肉体において喜ぶこと。魂において喜ぶことも分かると思います。自分の思いの中で、マインドの中で感じ取ったり、感情の部分で感じ取るような喜びです。でもそれは時に一時的な喜びで、状況が悪化するとその喜びも冷めてしまったり、その喜びが失せてしまったり、その喜びは持続するものではありません。喜怒哀楽と言われるように、状況によってはその喜びはコロコロ変わってしまう。それらは全て表面的な喜びです。肉体における喜びも一時的です。肉の快楽。魂の喜びも、これも状況によって左右されてしまう一過性のある一時的な喜びに過ぎません。

でも人間の最も奥深いところ、それこそが本当のあなたです。それこそが人間の最深部にあたる霊の部分です。この霊における、本当の自分における喜びこそがここで言われている喜びです。それは全き喜び、完全なるパーフェクトな喜び。それは神様に関連してしております。肉の喜びは肉体に関連しています。魂の喜びは物質に関連してしております。みんな目に見えるものによって左右される、影響を受ける喜びです。肉体は朽ちます。物も朽ちます。ですから喜びも同時に朽ちてしまうわけですが、でも人間の最も奥深いところで、霊で感じる喜びというのは神に関連していますから、神は永遠なるお方です。その喜びもまた永遠なるもの。それは時間と共に移り変わったり、消えてなくなってしまふものではありません。これは永続するもの、満ち溢れるものであります。全く次元の異なる喜びです。それがここで言われている喜びです。ルンルン気分だとか、ホカホカ気分だとか。気分というものは移り変わりやすいものです。ウキウキハッピーです。上機嫌です。機嫌が良い時はいいかもしれません。機嫌が悪くなったらどうでしょうか。でも、そのような浅い感情的なレベルにおける表面的な喜びではない、この最も深い喜びは動じることがありません。揺るがない喜びで、溢れ出る喜びであります。

イエス・キリストもこの喜びについて何度も語っております。ですからこれもまたヨハネのオリジナルではなくて、イエスから受け継いだ教えであります。ヨハネの福音書 15:11 を見て下さい。『わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは（イエス・キリストの語られたメッセージの目的の1つです。）、わたしの喜びが（イエス・キリストの喜びが）あなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。』次元の違う喜びだと言いましたが、この喜びとはイエス・キリストの神の喜びであります。人間の喜びではないんです。イエスの喜びが私たちの喜びとなる時、まさに喜びは全うされるわけです。全き喜びとなります。溢れるばかりの喜びとなるわけです。16章22節も見て下さい。『あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。』何があってもこの喜びは消えない、

誰にも奪われない。素晴らしいです。24 節もお読みします。『あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。』イエス・キリストの名によって求めるならば、あなたがたの喜びは、私たちの喜びは満ち満ちたものとなります。でも私たちが求める時はイエスの名によって求めません。自分の名で求めます。「私にとって最高のものを与えて下さい。私の考える最高のものを。」と。それはイエスの名によって求めることではありません。そうではなくて「私がどう思おうとあなたが私にとって最善と思うもの、ベストと思うことを私に与えて下さい。」それがイエスの名によって求めることです。ときにはそのイエスが与えようとされているものについてあなたは納得いかないかもしれません。「どうしてこのことは私にとってベストなのか。」でもイエスが与えて下さるものをあなたが受け取る時にはあなたの喜びは満ち満ちたものとなります。あなたが自分勝手に、これがベストだと。これが今自分にとって一番必要なものだと思込んでいるものは、必ずしもあなたを喜ばせるものではありません。場合によってはあなたを破滅に導くものであるかもしれません。ですからイエスの名によって求めるもの、それこそが私たちの喜びを満ち満ちたものとしします。一時的な喜びではなくて、消えてなくなってしまうような表面的な一過性のある喜びではなくて、いつまでも続く喜びです。何があっても奪いさられない喜びであります。

17 章 13 節にも目を留めて欲しいと思います。これはイエスの十字架につけられる前の晩に捧げたゲッセマネの園における祈りであります。『わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが（イエス・キリストの喜びが）全うされるために、世にあつてこれらのことを話しているのです。』イエスを信じる者たち、クリスチャンのうちにイエスの喜びがもたらされるように。イエスの喜ぶことをクリスチャンたちが喜ぶならば、その喜びはパーフェクトなものになります。満ち満ちたもの、溢れ出る喜びになるわけです。それは状況には左右されません。たとえ十字架に向かわなければならなくなったとしてもです。その喜びは消え去りません。状況によってコロコロ変わってしまう。喜んでいたらよる転んじゃう。そんなレベルの喜びではないんです。それは言わば無条件の喜びと言って良いと思います。順風満帆のときには喜べるけれども、逆境の時には喜べない。そんな喜びではないんです。例え逆境の時でも、例え悲劇に見舞われても、それでもこの喜びは溢れ出てくる。それはあなたの中からは決して自動的に湧き出てこない喜びです。それはイエス・キリストを信じる者のうちから湧き出てくる喜びです。クリスチャンはイエスをその心の内に持っているわけです。イエス・キリストがクリスチャンの心の内に住まわっているわけです。ですからイエスが私たちの、クリスチャンの心の内で喜んで下さる。その喜びが私たちの喜びになる時、合致する時、その喜びは尽きることがありません。

では、どうやったらそのような素晴らしい完璧な喜びを私たちは得ることが出来るのでしょうか。体験出来るのでしょうか。もう一度テキストに戻っていただいてヨハネの手紙第一 1 章。先ほどは 4 節からこの手紙が書かれた第一の目的、なぜこの手紙が書かれたかという理由の 1 つを見たわけですがその前の節を見て下さい。1 章 3 節。『私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。』で、その後『私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。』と。文脈を見て欲しいと思います。どうやったらこの全き喜びを、溢れんばかりの完璧な喜びを手に入るのでしょうか。自分のものと出来るのでしょうか。それを個人的に味わうことが出来るのでしょうか。その秘訣は、そのカギは前節の『御父および御子イエス・キリストとの交わりです。』交わり、フェローシップです。ギリシャ語で言うコイノニアであります。御父と御子イエス・キリストとの交わりを通してこの素晴らしい喜びがあなたにもたらされます。詩篇 16 : 11 を見て欲しいと思います。『あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。』神様の御前には、これは神の臨在の内にはという意味であります、そこには喜びが満

ちているんです。神様の御前に喜びが満ちているんです。楽しみは永久とこしえなんです。御父と御子イエス・キリストとの交わりの中に、この満ち満ちた喜びがあるということを知って欲しいと思います。この喜びはどこで得られるのでしょうか。それは御父と御子イエス・キリストとの交わりの内にあります。常に御父と御子イエス・キリストと交わりを持っている人たちは、この喜びあずかに与ります。「なぜ私にはクリスチャンなのに聖書に書かれているような喜びがないのだろうか。」その時是非考えて頂きたい事は、あなたは今日御父と御子イエスキリストと交わりを持ったでしょうか。そのことを自問自答して頂きたいと思いません。主の御前に進み行く時、神の臨在の中に留まる時に、あなたは間違いなくこの喜びを体験出来ます。でもそこから離れるならば残念ですけれども約束されているこの素晴らしい喜びをあなたは味わえないわけです。

この教会では何度もお分かちしていますけれども、英語で喜びのことを JOY と言います。その JOY のそれぞれの頭文字をアクロスティックに捉えて、それを皆さんには何度となくお伝えしてきております。J は Jesus イエスのことです。O は Others 他者です、隣人のことです。Y は Yourself あなた自身または You でも良いと思います。あなた。JOY それぞれの頭文字からイエス、そして他者、あなた自身。これが順番になっているところを皆さんにも意識して頂きたいと思いません。この喜びの秘訣というのは、この優先順位がものを言うんです。まずイエス・キリストを第一とすること。御父と御子イエスキリストとの交わりをまず求めること。その次に Others です。他者です。で、最後が Yourself あなた自身です。これをもし反転させてしまうと、「いつも私は自分のことを喜ばせたいと、それを第一に考えています。」そうすると Y が一番頭に來ます。他者なんか二の次です。その場合は O が來ます。イエス・キリストなんか尚更。そうすると YOJ です。単語になりません。又は「私はクリスチャンですから一応イエスキリストは神ですから第一にします。」J が頭に來ます。でも「その次は私です。」 Yourself、Y が來ます。「他者なんかもう後回しです。」 O が最後です。そうすると JYO です。それはやはり単語としては成り立ちません。JOY が欲しければ、この優先順位をしっかりと守って欲しいと思いません。J、O、Y です。イエスが先です。その後はあなたじゃなくて、あなたの周りの人です。他者です。で、最後があなたなんです。自分を最後にすることが一番難しいかもしれません。でも私たちは常に自分を第一に、最優先に考えます。真っ先に自分のことを考えます。自分に焦点を当てます。フォーカスを置きます。朝から晩まで考えていることと言えば、自分のことばかり。四六時中何について考えているかということ、自分の生活について、自分の将来について、自分の悩みについて、自分の感情について、自分がどう思うか、どう感じるか。そのことしか考えていません。これはまさに自分を縛りつけて、自分を不幸にして、自分から喜びを奪う行為であります。多くの人は自分というものにこだわって、縛られて、それが故に悩み、苦しみ、そして不幸になっていく、惨めになっていくわけです。自分のことが心配で心配でたまらないわけです。でもいくら心配したところで喜べないわけです。

ところがもしあなたが朝から晩までイエス・キリストについて考え、朝から晩まであなた以外のあなたの周りの人、隣の人、他者について考え始めるならば、どういうわけかあなたのうちにこれまで体験をしたことのない深い喜びというものが見いだせ、それが徐々に湧き上がってきます。そしてついには満ち溢れるようになります。それまでは自己中心でした。自分のことばかり、自分に囚われていたんです。窮屈でした。自分のことばかり考えるので人間関係もいつもトラぶっていました。自分が優先だったんです。

イエス・キリストは、あなた方がもしわたしのようになりたいならば、もしあなた方がわたしのように幸せになりたいと願うならば、もしあなた方がイエスのその喜びに与りたいと願うならば、こうしなさいと言いました。それはマタイ 16 : 24 に書いてあります。『それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら（言い換えれば、イエス・キリストのようになりたいければ、イエ

ス・キリストのように充実した最高の人生を歩みたければ、イエスの喜びに私も与りたいとそのようにあなたが願うならば、こうして下さい。こうするように命じられています。)、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』これはまさに J、O、Y の順序のことを言っています。Jesus、Others、Yourself。JOY です。自分を捨てるということは、自分を最後に持って来るということです。自分のことを考えないということです。もう自分のことで悩まない、心配しない、自分中心に物事を考えないということです。逆にイエス・キリストに付いて行きたいならば、イエスを中心に考える。神中心に歩むようになる。同時にそれは自分の十字架を負う事でもあります。日本語で「十字架を背負う」と言うと、耐え難い苦難、重い負担や消えることのない罪等をいつまでも持ち続けることをよく「十字架を背負う」と言います。「過去に取り返しのつかない過ちを犯してしまった。私は自分の十字架を負って行かなければいけない。」とか、そういう使い方をいたします。で、残念なことにクリスチャンの間でもこのような理解を持って、自分の十字架というものを誤解する者があります。耐え難い苦難、重い負担、消えることのない罪等を持ち続けることが自分の十字架を負うことだと、クリスチャンですら誤解して、そのように歯を食い縛って「これは私の十字架だ。」と言い張って歩む人がおります。ある人は「癌が私の十字架です。一生私はこの癌と付き合って行かなければいけない。この癌こそが、この病気こそが、私の十字架です。」と、そういう言い方をするわけです。で、一般ではそれで通用するかもしれませんが、クリスチャンにとってその使い方は間違っております。確かに癌というのは耐え難い苦難であり、また重い負担であり、特にそれが重ければ重いほどもう逃れられない、一生付き合って行かなければいけない病というような言い方になるわけですが、でもクリスチャンにとっての十字架というのは、イエスの十字架のことであります。イエスの十字架というのは、そのような癌のようなものではありません。誰も癌になりたくて癌になる人はいないわけです。「本当は癌になりたくないけれども、本当は癌患者になりたくないけれども、でも仕方がない。これは私の十字架です。」とそういう言い方をするんですが、イエスの場合はどうだったでしょうか。イエスの十字架はどうだったのでしょうか。それは強制されたものではなかったはずで、イエスの十字架は自ら進んで、強制的ではなくて自発的に負った十字架です。ですからもし癌をあなたの十字架と言うならば、あなたは自ら癌細胞を体に植え付けて「自発的に癌患者になります。」と。「癌患者の気持ちに分かりたいから、癌患者とともに苦しみ、癌患者と共に死んでいきたいから、私はこの十字架を背負います。」と、それであれば正しい言い方になります。でもそうでない限りは、その癌というのはあなたの十字架ではありません。イエス・キリストの十字架、すなわちあなたの十字架とは、強制されるものではありません。勿論それは楽なものではないこと、これはイエスを見れば明らかです。できれば避けたいという思いもあります。でもそれでもなお自ら進んでイエスはご自身の十字架を背負いました。それはひとえに自分のためではなくて、他者のためでした。私たちのためだったんです。Others であります。自分が一番最後です。他者のために十字架を選ぶんです。あなたの周囲の人のために、彼らの幸福のために、彼らの最善のために、彼らの利益のために、あなたは十字架を自ら選ぶんです。そのためにはあなたの権利を捨てるんです。他者のために喜んであなたは犠牲になるんです。敢えてその周りの人のためにあなたは苦しい道を自ら進んで選び取っていくわけです。ですからそこにはいつでも大きな犠牲の伴う愛が息づいているわけです。この愛なしに十字架は語れません。ですから降って湧いたような苦難が襲ってきて「これが私の十字架です。これと一生付き合って行かなければいけないです。」というのは全く間違った使い方であり、日本語で言う「自分の十字架を背負う」というのは全く間違った使い方、誤解であります。イエス・キリストが私たちのことを愛して止まらなかったのも、十字架にすら掛かって下さったわけですから。十字架の上で苦しみながらも考えていたのは、あなたのことです。私のことです。もしあなたが画鋸で指先でも刺してしまったら、何を考えるでしょうか。真っ先に自分のことだと思えます。もしつま先をどこか角にぶつけてしまって痛かった時に、あなた真っ先に誰のことを考えるでしょうか。「痛い。私の夫がこ

んな痛い思いをしないように守られますように。」と、あなたは祈るでしょうか。「誰がこんなところにこんなものを置いて。夫に違いない。」とか、「すぐ片付けないから。」とか。イエスは十字架の上で最も苦しんでいたのに、考えていた事は自分のことではなくて私たちのことです。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。」自分の十字架を負うというのは、他者を愛することです。ですからイエスは「あなたがわたしの喜びに与りたいと本当に願うならば、わたしのように生きたいと本当に願うならば、まずは自分を捨てなさい。そして自分の十字架を負って、その上でわたしについて来なさい。」これが喜びを受ける秘訣です。JOY。J、O、Yの順番です。優先順位を間違っははいけません。まずはイエスキリスト、Jesus。次に他者です。あなた以外の者です。Others。Oです。で、最後があなたです。Yourself。You。あなたです。

で、実際に今読んだマタイ 16:24 のその直後も見て下さい。25 節。『いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。』逆説的なことが書いてあります。私たちは自分を中心に、自分を生かそう、常に自分のことばかりです。自分が幸せになりたい、自分がおいしい思いをしたい、自分が楽をしたい、自分は悲しみたくない、辛い思いをしたくない、嫌な思いをしたくない、惨めな思いをしたくない。自分が、自分がと。でも、その自分の命を救おうと思う者は、却ってそれを失ってしまうんです。自分を喜ばせようとしている者は、却ってその喜びを失うと言っているんです。でも、逆に自分を捨てるならば、そして自分の十字架を負うならば、逆に（パラドックスです。）あなたは今まで体験もしたことのないような喜び溢れる命に与るわけです。大発見です。イエスを第一とし、あなた以外の他者を次に、そしてあなたを最後に持ってくる時に、あなたは発見をします。「これが聖書で約束されていた喜びだったのか。これこそがイエスが味わわれた喜びだったのか。嬉しい、私もイエスと同じ喜びに与ることができた。こんな喜びは決して他では味わえない。」是非皆さんにも味わって欲しいと、ヨハネはこの手紙を今日あなたに宛てております。J、O、Yで初めて Joy 喜びは成り立ちます。あなたが真っ先に来て、他者が次で、イエスが最後だったら、YOJ。またあなたは敬虔なクリスチャンのふりをして一応イエス・キリストが一番ですと言いながら、Jを持ってきて、でも次は私です。Y。最後は Others 他者ですと。JYO。それも成り立ちません。

で、次にまたテキストに戻っていただいてヨハネの手紙第一が書かれた目的、理由は 4 つあると言いました。第一番目が、喜びが全きものとなるため。1 章 4 節に見い出せました。または、喜びが満ち溢れるため。

で、次の第二番目の理由、目的は 2 章 1 節に見られます。『私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは（このヨハネの手紙第一が書かれたその理由は、目的は）、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。』第二番目の目的、理由は、私たちが罪を犯さなくなるためであります。罪から解放されるためであります。罪を犯すしかなかった罪人の生活から、きれいさっぱり足を洗って解放されるということです。罪人だから罪を犯すのはある意味当然です。私たちは罪を犯すから罪人なのではありません。罪人だから罪を犯すんです。純真無垢な小さな子供ですら、自分のことばかり考えています。親のあなたのことなんて赤ちゃんは考えていません。まさに罪の性質であります。嘘をつくことを教えなくても子供は平気で嘘をつきます。それは生まれながらに罪人であるからです。おもちゃを仲良く分けなさいと教えてあげなければ、誰にも渡すものか。他人のおもちゃだって自分の物だと言い張ります。私たちの性^{さが}であります。でも、だからといって私たちは一生涯罪を犯しっぱなし。罪から逃れられない人生を送る羽目になってしまうのでしょうか。そのような罪人の人生を私たちは強いられるままなんのでしょうか。「弱いから仕方がないんです。」クリスチャンでもそういう言い訳をします。「クリスチャンだって罪人でしょう。不完全なんですよ。だから仕方がないんです。また同じことを繰り返しました。でもそれは仕方がないん

です、罪人ですから、弱いですから、不完全ですから。これは生まれながらの性格ですから、これがうちの家系の、家の先祖から代々受け継いできた性質なんです。これが私の中に流れている血なんです。」とか、いろんなことを言って言い訳をします。「こんな育てられ方をしたからこんなになってしまった。こんな教育を受けたからこんなふうになってしまった。だから仕方がないんです。」とか、「だから罪を犯しても仕方がない。もう諦めるしかない。」中には開き直す者もあります。でもヨハネはハッキリ言います。『私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。』と。私たちは、イエス・キリストを信じる者は、「弱いから仕方がない。不完全だから仕方がない。」という言い訳をせずに、罪を犯さなくなると。罪を犯さないで生きることが出来るのだということを、ヨハネは主張するわけです。そのために私はこの手紙を書いたと。やめられない罪というのがあるのでしょうか。どうしてもやめられない、逃れられない罪。やめたくてもやめられない。がんじがらめに縛られてしまっている悪癖のような、悪い癖のような罪。それがあなたにあるのでしょうか。どうしてもやめられない。依存症のような罪。これがないと生きていけない。でもそのような罪からも解放されるんです。私は牧師ですからよくこういう相談を受けます。「どうしてもこの罪がやめられないんです。これは私のもう悪癖になっています。私はこのことの依存症なんです。」とか。「この私が罪をやめられるように祈って下さい。」とかよく言われます。でもそのようなリクエスト受けても私は「あなたのためには祈りません。」と言います。「どうしてですか。」とびっくりされます。「私はこの罪がやめたくて仕方がないんです。でもやめられないんです。ですから祈って欲しいんです。」「否、あなたのためには祈りませんよ。」これは祈るべき内容ではないんです。祈るべき問題ではないんです。私がアドバイスするのは、「あなたのために祈ります。」ではなくて、私が与えるアドバイスは「あなたは聖書の御言葉を学びなさい。ヨハネの手紙にはこう書いてある。」と。「**第一ヨハネ 2章 1節**に『私がこれらのことを書き送るのは（このヨハネの手紙が書かれた目的は）、あなたが罪を犯さなくなるためである。』だからこの手紙を学びなさい。だからこの聖書をあなたは学びなさい。」他にも**詩篇 119 篇 9～11 節**も引用したりします。御言葉の讃歌で有名な箇所です。『**9** どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるのでしょうか。（もうこんな罪汚れた生活をしたくない。もうこんなライフスタイルから早く逃れたい、解放されたい。そのためには）あなたのことばに従ってそれを守ることです。**10** 私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。**11** あなたに罪を犯さないため（罪を犯さないため）、私は、あなたのことばを（頭にたくわえました、とは書いてありません。）心にたくわえました。』「どうしてもこの罪がやめられないんです。祈って下さい。」と言われても私は祈りません。その代わりにアドバイスします。「御言葉をあなたの心にたくわえなさい。」と。「聖書をもっとしっかりと学びなさい。」と。どうしても罪がやめられないという人に限って、聖書をろくに読みません。バイブル・スタディーにも来ません。礼拝にも滞^{とど}って、毎週のように来るということではなく。結局のところほとんど聖書も開かず「どうしても罪がやめられないんです。」聖書は開きませんが、携帯電話、スマートフォン、インターネットは開いて、そこでポルノサイトを見ます。御言葉は心にはたくわえませんが、でも罪はたくさんたくわえていくわけです。教会に行かないでどこへ行くのでしょうか。聖書に向かわずにどこに向かっていくのでしょうか。罪を犯さないために何をすべきかは、聖書があなたに教えてくれております。「御言葉を心にたくわえなさい。」牧師に祈ってもらいなさいとは聖書には書いてありません。カウンセラーのところに行って、この依存症を克服するようには書いてありません。御言葉を心にたくわえるようにと。勿論頭ではありません。頭ではないということは、ただ知識として、情報として蓄積するという意味ではなくて、しっかりと頭の知識を心の知識に下ろしていく必要があります。天国と地獄の差が 30 センチしかないということは、前にも皆さんにお伝えしました。その 30 センチの距離というのは、頭と心臓の距離です。 30 センチほどしかありません。まあ、首が長い人は 45 センチぐらいあるかもしれませんが、だいたいそれぐらいです。頭だけの知識では天国には行けません。

その知識は心にまで引き下ろさなくては、ハートにまで下ろさなくてはならないんです。「イエスを主と頭で信じ」とは書いてありません。心で信じ、口で告白する者は、誰でも救われるんですが、頭で信じるだけでは誰も救われないんです。むしろそのまま罪のうちに滅び行くだけであります。地獄にまっしぐらです。ですから御言葉をしっかり学ぶように。イエス・キリストはヨハネの福音書 15 章 3 節というところで、『わたしがあなたがたに話したことばによって、あなたがたはきよいのです。』と。イエスの言葉によってきよめられていく。このことをヨハネは理解したわけです。皆さんも理解して欲しいと思います。もう罪を犯したくない。もう罪の生活からは解放されたい。完全に足を洗いたい。もうこの束縛から、もうこの葛藤から解放されたい。この依存症をやめたい。やめたくてもやめられない罪から逃れたいと願うならば、是非この聖書を開いて下さい。D.L.ムーディーという人はこう言いました。英語でまずお分かちします。

“This book will keep you from sin. But sin will keep you from this book.”

日本語に訳せば「この本は、すなわち聖書はあなたを罪から遠ざけます。しかし罪はこの本からあなたを遠ざけます。」名言だと思います。この本は、この聖書はあなたを罪から遠ざけるんです。先ほど読んだ箇所でも証明されております。でも同時に罪はこの本から、聖書からあなたを遠ざけるんです。御言葉を読まないように、学ばないように、教会に行かないように、罪はあなたに誘惑を仕掛けてきます。圧力をかけてきます。

またD.L.ムーディーは他にもこういう言葉を残しています。「聖書は私たちの知識を増やしはしません。しかし私たちの人生を変えます。」私たちの人生、または私たちの生活を変えます。これが聖書です。これが聖書の力なんです。あなたの頭の知識を増やすのが聖書ではなくて、あなたの人生を、生活を全く 180 度変えてしまう力があるのがこの神の言葉です。神の言葉は生きていて力があるんです。この本はただの本じゃないんです。ただの道德の教科書じゃないんです。ただの宗教書じゃないんです。この書はあなたの人生を変える生きた言葉です。

で、その生きた言葉という表現が、いのちの言葉として**第一ヨハネ 1 章**の頭から語られているわけです。どうしてあなたは聖書を読みたくないんでしょうか。どうしてあなたを聖書を学びたくないんでしょうか。どうしてあなたはバイブルスタディーに来たくないんでしょうか。どうしてあなたは教会に行きたくないんでしょうか。理由ははっきりしています。それは御言葉に対する飢え渴きがないからです。御言葉を知りたい、学びたい、取り入れたい。そういう気持ちがないのはなぜでしょうか。この世のジャンクフードであなたはお腹いっぱいだからです。折角ご馳走が用意されていても、栄養価の高いバランスの取れた素晴らしいグルメが用意されていても、あなたがジャンクフードばかり食べていたら、お菓子ばかり食べてファーストフードばかり食べていたら、折角のご馳走も食欲減退です。「ああ、おいしそうだなあ。これは体に良い。それは分かる。でも私はお腹いっぱいなんです。もう食べたくないんです。もう吐きそうなくらいジャンクフードでお腹いっぱいなんです。」聖書を開くよりもあなたはテレビやインターネットのスイッチを入れます。聖書よりも新聞や雑誌。そうしたものにたくさん時間を使い、労力を使い、金銭を使っているならば、あなたは必然的に御言葉に対する飢え渴きを失うようになります。ジャンクフードでお腹がいっぱいになってしまっているからです。だからこそ御言葉に対する食欲がわからないんです。飢え渴きがないんです。朝から晩までジャンクフードばかり食べているからです。是非、罪を犯したくないと心底願っている方は、**ヨハネの手紙第一**を読んでみて下さい。そうすれば約束します、保証します。あなたは罪を犯さなくなります。これは不思議なことです。理論では説明できません。でも、私の個人的な体験としても、もしかしたらこの中にも既に体験されている方もいると思うんですが、御言葉を学んでいくうちにいつの間にか罪を犯さなくなるんです。いつの間にか罪を犯したくない、と思うようになります。いつの間にか罪対してまったくもって関心を持たない、魅力を感じなくなります。かつてはあまりにも魅力的で、すぐに目を奪われてしまいました。かつてはこの罪に完全に支配されていました。でも、御言葉を学

んでいるうちに、その罪の誘惑も、罪の支配力も、段々段々弱まってきて、そして罪を犯すことに特別な喜びも、かつてのようには見出せなくなります。昔はあんなに楽しかったのに。昔はあんなに喜んでいたのに、いつの間にかもう何も面白くない、何も気持ちよくない。むしろ御言葉によって得られる喜びの方が遥かに深い。遥かに喜ばしいということで、気が付いてみたら罪を犯さなくなっている。しかも罪のもたらす弊害というものも御言葉から教えられていくと、恐ろしくなってきます。今までは何も考えずに、後先考えずにすぐに手を出していました。でも、「罪から来る報酬は死である。蒔いた種は刈り取るんだ。」ということをお言葉で教えられているうちに、「本当にこれは恐ろしいことだった。こんな罪を犯したらこんな結果が伴うのか。だったらこんな馬鹿らしい事はやっつけられない。やめるべきだ。」聖書の中の登場人物もたくさん罪を犯して、大失敗を犯しています。その結果どんな辛い思いをして、どんな惨めな最期を遂げていったのか、私たちは先人たちから学ぶことが出来ます。歴史から学べるんです。他者の経験から学べるんです。その他者の失敗の経験を、失敗談を、あなたの経験とする必要はありません。人は経験から学ぶものですが、自分の失敗の経験をしなくてもあなたは他者の、特に聖書の登場人物の失敗談を通して学ぶことが出来ます。無料で学べます。自分の失敗談は高くつきます。代価が伴います。ですから聖書から、例えばサムソン、例えばダビデ、考えて欲しいと思います。そして罪のもたらす結果についても、しっかりと目をそらさずに向き合って欲しいと思います。すべての罪は確かに赦されます。イエス・キリストがあなたのすべての罪を十字架で負って下さいましたから、イエスの血潮によってきよめられない罪は他にありません。ただひとつ、イエスを信じない罪だけが赦されない罪に相当しますけれども、どんな罪でも赦していただけます。ただし、赦されるからといって罪の結果まで帳消しになるわけではありません。人は罪を犯せば、人は種をまけば、必ず刈り取ることになります。ですから、その結果は避けられない以上、私たちは赦されるからといって罪を犯しまくるということはしないわけです。賢い者は罪を犯さなくなるわけです。

で、次に3つ目の理由。**第一ヨハネ 2:26**を開いて下さい。『私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。』惑わそうとする者たちがいるから、この**第一ヨハネ**を書いたんだと言っているわけです。で、この“惑わそうとする者たち”というのは、具体的には既に初代教会が発足してから教会に入り込んできて、教会の中に既に1世紀内には蔓延した異端的な教えのことを言っています。その異端的な教えのことを、グノーシス主義とも言います。英語で Gnostic と言います。で、これは同じくエペソの教会に宛てられた手紙で、特にエペソの教会の牧師に宛てられた手紙で、**第一テモテ**というのがありますけれども、その**第一テモテ 6:20**、そこで教会を惑わす教えについて言及されています。『**テモテよ。**(エペソ教会の牧師です。) **ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。**』この「**靈知**」というのがグノーシス主義であります。“グノーシス”というのは、ギリシャ語で“知識”という言葉です。「**靈知**」というのは直訳すると、ただの“知識”です。知識が人を救うんだと。で、勿論これは聖書の知識ではありません。「聖書だけでは不十分ですよ。聖書に加えてプラスアルファ。これがないとあなたは救われません。これがないとあなたは聖書を正しく理解できません。聖書に加えて原理講論。聖書に加えてこれこれと。」モルモン教とか、そういうことが異端のアプローチでなされることです。「あなたには特別な知識が必要です。聖書の知識だけでは不十分ですよ。」惑わそうとする者がいるから、この手紙を書いたのだと、ヨハネは言っています。異端的な教えが既に蔓延していたわけです。エペソの教会にもそれが蔓延していたということ。

また**第一テモテ 4:1**にもこう書いてあります。『しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。』後の時代、世の終わりになると、特に教会の中には惑わす霊と悪霊の教え、悪霊の教理に心を奪われて、信仰から、聖書的な健全な信仰から離れる者たちも多く起こされてくる。これが世の終わりの教会の特徴。世の終わ

りの教会は背教するようになるということが、ここにも書かれているわけです。で、世の終わりとはいつのことかと言えば、いま私たちが生きている時代だと私は確信しています。キリスト教会の中にもこの偽りの教えが、悪魔的な教理がはびこっているわけです。

ヨハネの手紙第一 3:7『子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。(だれにも惑わされてはいけません。そのためにこの手紙が書かれています。) 義を行なう者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです。』と。偽りの教え、人を惑わす教えをもたらす者は、その行いが正しくないということも1つ見分ける根拠であります。良い実は良い木からなりますが、悪い実は悪い木からなるわけです。

で、第二ヨハネ7節。1章しかありませんから7節を見て下さい。『なぜお願いするかと言えば、人を惑わす者、すなわち、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が大ぜい世に出て行ったからです。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。』と。反キリストの教えが、教会の中にも浸透してきていると、蔓延してきているという警告が、繰り返しなされております。偽りの教えに、非聖書的な教えに引き込もうとする惑わしの霊が働いております。彼らは一見すると熱心で真面目で良い人に見えます。でも彼らの言っていること、教えていることは、聖書から逸脱した教えであります。で、よくよくつぶさにその人の生活を観察してみると、実際にはイエス・キリストのように生きていないことも見えてくるわけです。行いが正しくない。結んでいる実が良くない実であるということも見えてきます。すべての教えは、真理の御言葉によって吟味しなければいけません。その教えが正しいか、間違っているか吟味する術は、この真理の御言葉、神の権威であるこの聖書であります。使徒の働き 17:11 は皆さんにとってお馴染みになっている聖句だと思います。マラナサ・グレース・フェローシップにおけるすべてのバイブルティーチングにおいて、この使徒の働き 17:11 は念頭に置いて頂きたい。常にこの聖句をもって臨んで頂きたい。そのようなモットーとすべき聖句であります。これはメッセージを聞くだけではなくて、ありとあらゆるセミナーであったり、本であったり、すべての教えを吟味する際には、この聖句をいつも意識して下さい。『このユダヤ人は (ペレヤという所のユダヤ人ですが)、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。』非常に熱心に御言葉を聞いていると、その人は良い人たち、立派な信仰者と思えるかもしれませんが、それだけでは良い人ではないんです。それだけでは素晴らしい信仰者ではないんです。熱心に聞くだけではいけないんです。熱心だけで知識がないのは良くない、と聖書にありますけれども、ここでは正しい知識を持つために、はたしてそのとおりかどうかと (たまに聖書を調べたのではなくて、) 毎日聖書を調べた。この人たちこそが良い人だと。良い人になりたいと願うならば、非常に熱心に御言葉を聞いて下さい。そしてその上で、毎日聖書を調べて下さい。果たして聖書的かどうか。常に御言葉によって判別して頂きたい、吟味して頂きたいということです。この教えは聖書のどこに書いてあるのか。聖句が使われていても、その聖句は果たしてちゃんと文脈によって解釈された上で使われているかどうか。文脈を全く無視した形で、その人の教えをただ正当化するために利用されていないだろうか。文脈から外されてその聖句が独り歩きして、都合の良いように私的解釈されていないだろうか。聖書で吟味するとは、まさに文脈によって聖書全体をもって理解するという事です。一部の聖句が使われていたら、これは聖書的な教えだと思わないで欲しいと思います。聖句がふんだんに使われていたとしても、その聖句はちゃんと文脈からとられたものかどうか。文脈を無視した形で使われていないだろうか。御言葉を濫用するという事もサタンの常套手段です。サタンはイエス・キリストを誘惑する際に、御言葉も使ったんです。ですから、御言葉が使われているから、聖句が引用されているから、これは正しい教えだと思ったら大間違いです。サタンだって聖書を引用するんです。

詩篇 119:104 も聞いて頂きたいと思います。御言葉の讃歌の中から 104 節を見て欲しいと思います。『私には、あなたの戒めがあるので、わきまえがあります。(わきまえがある。ちゃんとジャッジ出来るという

ことです。ちゃんと判断力がついていると。なぜならば神の言葉である戒めがあるから。) **それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。』**と。偽りの道、偽りの教えに振り回されたくなければ、陥りたくなければ、神の戒めの言葉にしっかりと目を留めて欲しいと思います。御言葉が、あなたをこの偽りの教えから守ります。惑わそうとする者たちから身を守るためには、御言葉があなたを守ってくれるということを信じて欲しいと思います。

逆に、すぐに惑わされてしまう、騙されてしまう人は、聖書をほとんど読まない人たちです。あなたが本物を知っていれば、偽物はいとも簡単に見分けがつかず。銀行員は毎日のように本物のお札を取り扱って、手で触って数えているわけです。偽札が持ち込まれても、手のその感覚だけで見分けることができたり、目の感覚だけで見分けることが出来ます。機械を通さなくても、透かしを通さなくても、特殊な光を当てなくても、本物を普段触っている人たちは、本物を普段見ている人たちは、すぐに偽札を、偽物を見分けることが出来ると言われています。それと同じように、あなたがもし偽物に惑わされたくない、騙されたくない願うならば、常に本物に触れておく必要があります。たまにしか本物を見ない、たまにしか本物に触れない、であればすぐに騙されます。毎日のように聖書を調べる。毎日のように聖書に触れるという必要があります。

第2テモテ 4:2~4もお読みしたいと思います。『**みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。**(これが今私が皆さんにやっていることです。その理由は次の節に書いてあります。)³というのは(その理由は)、人々が(ここにいる皆さんが)健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴真理から耳をそむけ、空想話にそれで行くような時代になるからです。』私がもし、時が良くても悪くても御言葉を宣べ伝えなければ、皆さんは必ずと言っていいほど、耳障りの良い話を求めて、自分たちの心を和ませてくれる、心の傷を癒してくれる、お涙頂戴の感動タッチの物語であんまり罪だとか悔い改めだとか聖書の難しい教えはせずに、世の中でも関心のある時事であったり、話題のニュース・流行であったり。そういう話を2時間もかけないで15分ぐらいでまとめてもらって、話してもらったほうが良いと、そう思うわけです。私が皆さんの立場でも、私はそう思うようになってしまうわけです。御言葉が常に語られていなければ、私たちはそういう傾向に陥っていくわけです。惑わそうとする者が、私たちの身近におります。玄関先にピンポンとしてきます。「いっしょに聖書を学びませんか。」とか。是非気を付けて欲しいと思います。

で、最後になりますけれども、4番目の理由。ヨハネの手紙第一が書かれた4番目の目的とは、**5章13節**、目を留めて下さい。『私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは(ヨハネの手紙第一を書いたのは)、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。』イエス・キリストを信じる者は皆永遠の命を持ちます。これはヨハネ**3:16**にも書いてある通りです。『神は、実に、そのひとり子(イエス・キリスト)を世に与えるほどに(あなたに与えるほどに)、世を愛された。(あなたを愛された。)それは御子(イエス・キリスト)を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』御子を信じる者は永遠の命を持つと、ちゃんと聖書に書いてあります。「でも、書いてあってもよく分かりません。言い方を変えれば、自分が本当に永遠の命を持っているかどうか、つまり本当に救われているかどうか分かりません。本当に私はクリスチャンなんですか。救われているんでしょうか。どうもそういう感覚が分からないんです、持てないんです。そういうフィーリングが私にはないんです。もしかしたら私は救いを失ってしまったのではないのでしょうか。救われている確信がないんです。天国に本当に行けるかどうか、私には分からないんです。不安なんです。」そういう人に対して、ヨハネはこの手紙を書きました。「あなたがたが永遠のいのちを持っているということを、分かってもらいたい。本当によく分かってもらいたい。救いが何なのか。本当に救われている、そ

のことを確信してもらいたい。」

第二ヨハネ 9 節にも目を留めて欲しいと思います。『だれでも行き過ぎをして、キリストの教えのうちにとどまらない者は、神を持っていません。(キリストの教え。聖書的な健全な教えです。逆に非聖書的な、聖書から逸脱した教理に走ってしまうものは、勿論神を持っていません。) その教えのうちにとどまっている者は (聖書的な健全な教えのうちにとどまっている者は)、御父をも御子をも持っています。』と。ですから先程見た 3 番目の理由とも深い関わりがあります。正しい聖書的な教理を持てば、あなたは自分が本当に救われているかどうかということについて疑問は持たない。聖書をしっかり学べば、あなたは自分の救いに対しては疑いを持たなくなると。永遠の命とは、神とイエス・キリストを知ることだと、ヨハネ 17 : 3 にもありますし、また第一ヨハネ 5 : 20 にも『この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。』イエス・キリストこそ、まことの神、永遠の命であると。イエス・キリストが永遠の命そのものなんです。イエス・キリストが私たちの命の源なんです。ですから、イエスは命の君などとも呼ばれております。イエスはヨハネ 14 : 6 で「わたしがいのちだ。」と言いました。「わたしが道であり、真理であり、いのち。」「わたしはよみがえりであり、いのち。」命です。イエスが永遠の命そのものであります。ですから、イエスを持っている者は、当然永遠の命を持っているということになります。これについては第一ヨハネ 5 章 10~12 節。ちょうどその目的が書いてある 13 節の手前の部分です。文脈で見たいと思います。『¹⁰ 神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。¹¹ そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。¹² 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。』で、その後で文脈で 13 節があるわけです。『私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。』と、ハッキリ目的が書いてあります。ですから、是非この永遠の命という素晴らしい救いを自分のものであると確信したいと願うならば、ここに書かれているように、御子イエス・キリストを信じて、その御子について証しされたその言葉、聖書の言葉を信じて欲しいと思います。「どうやったら救われるのでしょうか。」ローマ 10 : 9~10 というその聖書の言葉には救いの方法が書いてあります。『⁹ なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中から (よみがえらせた) よみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われる (あなたは永遠の命を持つと書いてあります。)¹⁰ 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。』と。それが神様の言われていることです。神様の言ったことを信じるならば、あなたは救いについては疑いの余地もなく確信出来ます。救いは保証されているんだと確信出来ます。

同じくローマ 8 : 1 も有名な聖句です。これも救いについての聖句であります。『こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が (すなわちイエス・キリストを信じるクリスチャンは) 罪に定められることは決してありません。』「罪に定められる」というのは、永遠の滅びに至るということです。地獄に落ちるということです。^{ひとたび}一度イエス・キリストを信じた者は、もはや罪に定められることはない。神の裁きを受けずに、永遠に救われたまま。救いは保証されるんだと書いてあります。神が言われたことを信じるのが肝要です。イエス・キリストもこの救いの保証について、素晴らしい言葉を私たちに残して下さっております。ヨハネの福音書 10 章 27~30 節。救いについて疑ってしまったら、聞いて欲しい聖句です。『²⁷ わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。(イエスの羊であるならば、クリスチャンならば、いつでもイエスの声を聞き分けますし、イエスについていきます。イエスの声を聞き分けられない、イエスについていけない者は、勿論イエスの羊ではありません。)²⁸ わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく (彼らは決して滅びることがないんです。^{ひとたび}一度イエスの羊になってしまえば、もう救いは保証されています。)、また、

だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。(イエスの羊は、羊飼いのイエスの御手の中でしっかりガードされます。誰も羊泥棒がイエスの手から奪い去ることはできません。) ²⁹ わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。 ³⁰ わたしと父とは一つです。』イエスの御手の中にある私たち羊は守られますが、同時に父の御手の中にも私たちは握られている、守られている、ガードされているということも書いてあります。ダブル保証です。イエスの手の中でも充分ですが、御父の手の中でも私たちは守られています。御子と御父の手の中でしっかりと握られているのが私たちです。ですから、救いを失うなんていうことはありません。ありえません。これが聖書の言葉です。これが、神が言われていることです。これを信じるならば、あなたはもう救いについて疑問を挟む事はありません。迷うことも、疑うこともなくなると言っているんです。

「じゃあ、クリスチャンは何をしても救いを失わないんですから、どんな罪でも犯しまくっていいんでしょうか。救いの保証は、罪を犯すことの出来る免許状、ライセンスなんじゃないですか。」と誤解してはいけません。そんな思いつきをして、自分を賢いと思わないで欲しいと思います。そんな思いつきをする人は、もう 2000 年前の弥生時代からいたわけですよ。その弥生時代の人と言うのは、ローマ帝国の人ですけども、ローマ 6 : 1~2 にこう書かれております。その前の 5 章のところでは丁度このような議論がなされていたわけですよ。5 章 20 節からの文脈ですと『²⁰ 律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。²¹ それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。¹ それでは、どういうことになりますか。(と 6 章 1 節になります。) 恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。(もう救いは保証されている。だったら何をしたらって赦される。罪が増し加わるころに恵みが増し加わるんだったら、恵みを増し加えるために罪をじゃんじゃん犯そうじゃないか。その方が恵みが際立って、恵みが目立って、恵みをもっとたくさん示されるのではないのでしょうか。じゃんじゃん罪を犯して、むしろ恵みが増し加わるならそれもよしじゃないですか。 2 節に)² 絶対にそんなことはありません。(そんな馬鹿げた愚かな事は言うなど。) 罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。』クリスチャンは何をしたって赦されるから、じゃんじゃん罪を犯しても構わないんじゃないかと思う人は、おそらく救われていません。その人は罪が何かも全く分かっていないです。罪が赦されたということすら分かっていない人たち。第一ヨハネ 3 : 6 にこう書いてあります。『だれでもキリストのうちにとどまる者は (本物のクリスチャンは)、罪を犯しません。(凄いことが書いてあります。クリスチャンは罪を犯しませんと。「どうしよう、私は罪を犯してしまいました。やっぱり私はクリスチャンじゃないのでしょうか。救いを失わないと言われている以上、説明は 1 つだけ。罪を犯すのはやっぱり私がクリスチャンじゃないということでしょうか。」そうではありません。) 罪を犯す者はだれも、キリストを見てもないし、知ってもいないのです。』と。その後に 7 節を見ていただくと『子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。』と。惑わされないためにこのヨハネの手紙第一が書かれたということも言いました。これについての議論は今ここで詳しくするのは避けて、読み進めていく中で説明したいと思いますが、クリスチャンでも罪を犯します。でもそれは、結論から言うと、肉において罪を犯す。又は魂において罪を犯すに過ぎません。クリスチャンはイエスとともに十字架に掛かって死んで、古い自分は磔^{はりつけ}にされ、そしてキリスト・イエスにある者はすべて新しく造られた者になったわけです。新しく造られて、死んでいた、罪の結果死んでいたその霊がよみがえって、霊において私たちは罪を犯さない人生を歩むという新しい人生が、新しい歩みが与えられたわけです。ですから罪を犯さなくなるというのは、むしろ霊において罪を犯さなくなるということでもあります。肉や魂においては相も変わらずクリスチャンは罪を犯します。今ですら、この瞬間すらあなたは罪を犯しているかもしれません。御言

葉を聞きながらも、あなたはおぞましいことを考えているかもしれません。でも、あなたの霊は絶対に罪を犯しません。もし罪を犯すことが、あなたの霊において可能ならば、あなたは救いを失うこととなります。霊が死ねば、あなたは永遠の命を失うということになるからです。その場合、イエス・キリストはもう一度十字架に掛かって死ななくてはなりません。それはナンセンスな話です。イエス・キリストはすべての罪を、過去の罪も、現在の今犯している罪も、またこれから先犯してしまうであろう未来の罪も、全人類のすべての人の罪を十字架の上で負ってくださって、それは2000年前に完了したと言われた働きですが、**ヘブル書**によればそれは永遠の贖いというふうにも言われていますから、もうイエスは、もう一度十字架につけられて、もう一度私たちの罪を改めて贖うということを行なっても良いわけです。いずれにしてもここでは、すべての罪は赦されて私たちは永遠の命を持つ者となりました。すべての罪が赦された以上、私たちは永遠の命を失うことは決してありません。たとえこの肉において、この魂において罪を犯すことがあっても、その都度私たちは罪を言い表して、告白して悔い改めるならば、その罪はまたキリストの血潮によって洗いよめられる。そのことが**第一ヨハネ 1章**に書かれていますから、その辺りでまた触れたいと思います。

この世を歩んでいる以上は、必ず汚れてしまうわけです。ですからイエス・キリストは弟子たちの足を洗いました。でも全身を洗う必要はなかったんです。もう全身は洗わなくても、罪はきよめられているからです。でも、この世を歩んでいる以上は、この世の汚れを私たちは足の裏に付着させてしまうことになるわけです。当時はほとんど裸足のような格好で、サンダルで歩いていました。土埃が付くだけではありません。その辺に落ちている家畜の糞やいろいろな汚染物質を、不衛生なものを、汚いものをその足に付けてしまうわけです。ですから足は常に汚れるわけです。私たちの歩みは常に汚れてしまいます。でも、その都度洗いよめて、そしてきよい歩みを心がけていくことが出来ます。罪を犯さないで歩む事はクリスチャンには可能になっていくわけです。罪を犯したくないという思いが、すべてのクリスチャン内には植え付けられます。クリスチャンになる前は、むしろ罪を犯すことに喜びすら覚えていました。それを罪だとも思わずに歩んでいたわけですが、クリスチャンになりながらも、「どんな罪でも赦されるんだ。だから何をしたいいいんだ。」と言う人たちは、おそらくはまだ本当の意味では救われていないと思います。このことについては**ガラテヤ人への手紙 5：19～21**に書いてあります。そこには肉の行いのリストが書いてあります。悪徳の表と呼ばれるものです。それらの罪は、かつて私たちが喜んで無意識のうちにもやってきてしまったことです。でも今は、クリスチャンになってからはそれらは恐ろしい罪だということに気づいて、「もうそんな罪を犯したくない。」と。でも、時には弱いですから、肉において罪を犯すわけです。肉の行いに走るわけです。でも、私たちは救われていますから御霊が与えられています。聖霊が与えられていますから、御霊によって実を結ぶようになります。それは続きとして**ガラテヤ人への手紙 5：22～23**に書いてある御霊の実です。御霊の実は1つの愛の実の中にいくつかの要素が、側面が含まれているわけですが、例えばその中で一番最後に列記されている御霊の実は、自制です。セルフ・コントロールも出来る実です。ですから罪を犯さなくなるということが、御霊の力によって可能になります。意志の力じゃないんです。あなたの努力じゃないんです。カウンセリングでもありません。ニコチンパットでもありません。御霊の力によって自制出来るようになるわけです。御霊の力によって、聖霊のそのまさにきよい霊の力によって、きよい歩みが出来るようになるわけです。「**酒に酔ってはいけません。御霊に満たされなさい。**」お酒を止められなくても、御霊に満たされるならば、あなたはもう酒を飲む必要がありません。「お酒を飲まなければ憂さ晴らしが出来ない。お酒を飲まなければ本音で話せない。酔わなければストレス解消出来ない。楽しめない。」と思ったら大間違いです。御霊によって満たされれば、これまで経験もしたこともないような深い喜びをあなたは体験出来るようになります。そうすると、酒を飲むより御霊を飲んだ方がよほど良いという話になるわけです。

そしてこれらが全て**ヨハネの手紙第一**に書かれてあった内容であります。何のためにこの手紙が書かれたのか。4つの目的・理由があったと言いました。第1番目に、あなた方の私たちの喜びが全うされるため、満ち溢れるため。第2番目に、私たちが罪を犯さなくなるため。第3番目に、惑わされなくなるため。第4番目に、永遠の命を持っていることが良く分かるため。すなわち、救いにおいて確信を持てるため。これらのポイントは、クリスチャンたちが必ず必要とするものであります。なぜならば、これらの4つのポイントにおいてクリスチャンたちは思い悩んでしまうからです。

例えば「私には喜びがないんです。あの喜びは一体どこへ行ってしまったのでしょうか。救われた時のあの喜びは、あの洗礼式の時のあの喜びはどこへ行ってしまったのでしょうか。私は落ち込んでます。滅入っています。鬱状態です。ブルーです。すっかりへこんじゃいました。意気消沈したんです。もう寝込んでいます。もう挫折しました。全然喜べません。どうしたら喜びを全きものと出来るのでしょうか。どうしたら揺るがない喜びを得ることが出来るのでしょうか。どうしたら喜びに満ち溢れることが出来るのでしょうか。」滅入ってしまった、ふさぎこんでしまった、寝込んでしまった、鬱状態の人たちが大勢います。喜びを失ってしまったようなクリスチャンが大勢います。その人たちに対してこの**ヨハネの手紙**が答えを与えてくれます。解決を与えてくれます。

また、中には「どうしても罪がやめられないんです。」依存症のような罪にいつも悩んで、振り回されて、葛藤しているクリスチャンが大勢います。「どうしてもこの罪が、あの罪がやめられません。すっかり依存症になってしまいました。」パウロも**ローマの7章**でそのことを体験したことをまさに赤裸々に、正直に綴っております。これは特殊な体験ではないんです。クリスチャンでも罪に縛られて、依存症のような状態に陥って、どうしてもやめたくてもやめられない。私はしたくない悪を行っている。したいことがあるのに、したくないことをする。やめたいのにやめられない。そういう葛藤はすべてのクリスチャン、パウロですらするわけですから、**他人事**ではないと思います。そんな悩み相談を受けることが度々あります。皆さんもそういう相談を受けたことがあるかもしれません。

また、多くのクリスチャンたちは様々な教えに振り回されております。「あのセミナーでこういうことを聞きました、教えられました。この本にはこう書いてありました。あの牧師はこういうことを教えていました。混乱します。」攪乱させられてしまうわけです。いろいろな教理が飛び交っています。いろんな教理がありとあらゆるところで多くのクリスチャンたちを惑わしております。あの牧師、あの本、あのセミナー、あのネット。翻弄されるわけです。振り回されてしまうわけです。そういう悩みを抱えているクリスチャンが大勢います。「一体何が正しいのか分かりません。もう私には何が正しいのか、分からないんです。どれが本当の教えでしょうか。どれが正しいのでしょうか。」**ヨハネの手紙**は、エペソの教会に宛てて書かれたと言いましたが、**エペソ 4:14**というところにもこう書いてあります。『それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもあそばれたりすることがなく、』様々な教えの風、波がキリスト教界に押し寄せてきております。こないだは韓国から、信州のために、信州人の魂を救うため、救霊のために多くの犠牲を払って、労力と金銭もたくさん注ぎ込んでやって来てくれました。でも、それ以上に韓国からまた聖書に基づいていないような恐ろしい悪魔的な教えも押し寄せて来ているわけです。最も典型的なのは、『統一教会』です。社会問題にもなりました。合同結婚式というような事でも聞いていると思いますし、また少し前にもその統一教会から派生して出てきた『摂理』というグループもありました。『摂理』これも統一教会から出た、一応キリスト教の1派などとも呼ばれていますけれども、それもsex教団などということで話題になりました。教祖が沢山の女性信者を性的奴隷としている。先日逮捕されましたけれども、そんな韓国からも明らかに異端だと分かるような教えもそうですけれども、なかなか見極めが難しい、まるで本物のようだというような教会、また牧師、または教え。それらが日本の教会にも影響を与えています。でも、それらもすべて御言

葉によって簡単に見極める、判別することが出来るということを知って欲しいと思います。

で、また多くのクリスチャンたちは、自分が本当に救われているかどうか、思い悩んでしまっております。「本当に自分は救われているだろうか。もしかしたら、救いを失ってしまったのではないか。決して赦されないという罪を、死に至るといふ罪を私は犯してしまったのではないか。」多くのクリスチャンたちが悩みます。疑います。「天国には行けないんじゃないか。救いの確信が持てません。」そんな疑問が沢山クリスチャンたちの悩みの中に見られます。

「私は落ち込んでいます。ブルーです。鬱です。喜びが全くなくなりました。」

「私は罪に悩んでいます。どうしてもこの罪がやめられないんです。依存症です。どうやったらやめられるのでしょうか。葛藤しています。」

また「私は教えに、いろんな教えに惑わされています、振り回されています、翻弄されちゃっているんです。何が正しいのかもはや分かりません。彼らも聖書を使うんです。一体何が本当なんでしょうか。真理とはなんですか。」

また「私はもう救いの確信が持てないんです。救いを失ってしまったかもしれない。救われているつもりであって、この地獄に落ちてしまうかもしれない。どうしよう、怖いんです。天国に行けるかどうか私には分からないんです。」

そういう悩みをあなたも持ったかもしれませんし、そういう悩みを持っている人の相談をあなたは受けたことがあるかもしれません。実に大半のクリスチャンの悩みは、これらの4つのポイントから来ております。ですから、もしあなたが有能な、優秀な働き人となりたければ、ミニストリーというものをあなたが効果的に行っていきたいと思うならば、これらの4つをしっかりと踏まえた上で、悩みに対して、苦しんでいるそのクリスチャンたちに対してアドバイスしてあげて欲しいと思います。

「祈って下さい。」と言われても「私はあなたのためには祈りません。」と言った上で、「**第一ヨハネ**を5回読んで下さい。繰り返し読んで下さい。そうすればあなたの悩みはスッキリします。あなたの問題はハッキリします。どうしたら克服出来るのか。何が本当の答えなのか、ちゃんとこの手紙の中にすべてあなたは見出すことが出来ますから。この手紙をあなたはまずは繰り返し繰り返し5回は読んでみて下さい。」とアドバイスして下さい。そうすればあなたは、実に有能な優秀な働き人として感謝されることになると思います。「あなたの言った通りでした。私は**ヨハネの手紙第一**を読んでみました。私の疑問は全て晴れました。応えられたんです。有難う。」と言ってくれると思います、言われると思います。あなたはある意味で最高のカウンセラーになることが出来ます。ありとあらゆる悩み、大半はこの4つのポイントです。

「喜びがない、鬱なんです。」鬱になったら、すぐに私たちはお金をかけてアポイントをして、薬をもらって、多額のお金と膨大な時間をかけて鬱を克服して喜びを持ちたいと。でも、喜びたいならばこの手紙を読んで下さい。そこに処方箋が書いてあります。そこには薬も、そこには治療もしっかり得られるということが書かれておりますし、それを実際に体験出来ますから。ここに書かれているのは『いのちのこぼれ』についてです。イエス・キリストについて知れば、あなたは解放されます。

「どうしても罪がやめられない。」解放者が必ずあなたを解放してくれます。

「何が正しいのか、何が真理なのか分からない。」必ず『わたしが真理だ。』と言うイエス・キリストがあなたを正しい道へと、真理へと導いてくれます。

そしてこのイエスは、あなたを主の御下に、しっかり天国に導き入れてくれます。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』(ヨハネ 14:6)と言われたイエスがちゃんとあなたに救いの保証を与え、ちゃんと救いを全うして、天国へとあなたを導き入れて下さいます。救いの確信はしっかりと持っています。

そのことをこの**ヨハネの手紙第一**から私たちは確信出来ます。学ぶことが出来ます。ですから是非読ん

で下さい。ヨハネの手紙第一を学ぶということを聞いていて、皆さんの中にはもう読んできたという人があったと思います。「いや私は読んできませんでした。」という人もいたと思いますが、これは強制されるものではありません。でもこれらの目的・理由を知れば、あなたはきっと読みたくなると思います。律法主義で押し付けているものではありません。そうではなくて、あなたはこの理由さえ知れば、聖書を読みたくなります、学びたくなります。何度でも、5回でも6回でも読みたくなるはずであります。そのことを私は今強調していますので、それこそ誤解しないで下さい。誤解しないで、ヨハネの手紙を来週までに5回読んできて下さい。「5回なんて言わないで下さい。10回でも20回でも読んできますよ。」通して読んできて下さい。短いですから、そんなに時間はかかりません。5章しかありませんから。是非繰り返し繰り返し読んでみて下さい。今押さえた4つのポイントを意識しながらも読んでみて下さい。そうすれば、今仮にあなたがこの4つのポイントで思い悩んでいたとしても、このうちの1つでも全てでもあなたが抱え込んでいた悩みだったら、それが全て解消されるはずであります。来週にはあなたはすべての悩みを解消して、解放されて、ここに臨むことが出来ると思います。是非そのことを試してみてください。じゃ、また次回、これから本文に入って、**第一ヨハネ1章1節**からじっくりとゆっくりと見ていきたいと思ひます。